



Title	ガンに倒れた人々
Author(s)	高橋, ミツ子; 小池, 晶子; 佐藤, 千枝子
Citation	大阪公衆衛生. 1960, 7, p. 22-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84698
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

＝ ガ ン に 倒 れ た 人 々 ＝

府立成人病センター 高 橋 ミ ツ 子
小 池 晶 子
佐 藤 千 枝 子

昨年秋、阪大公衆衛生学教室との協力で私達成人病センターの保健婦は、子宮ガンで亡くなった方々の家族訪問調査を行ないましたが、その当時の記録をここにひき出してみました。訪問に出掛ける前は、家族の方達が、亡くなった方の事を快く話して下さるかどうか心配でしたし、また何かとぶしつけなこともおたずねしなくてはなりませんので、それがお気の毒で気乗りがしなかったというのが、どうも私達のほんとうの気持ちだったようです。

御主人のはなし

最初に57才の御主人と小学6年の女の子とが話してくれたことを書いてみます。

「駅の近くで遊んでいた小学校の男の子達が道案内をしてくれた。

もと中学校だった建物が改造されて、今は建築会社の仕事場となっている。〇〇さんはその仕事場の中に居を構えている大工さんである。

あらかじめ出しておいたアンケートの葉書を取り出して、訪問の目的を告げると〇〇さんは「わざわざすみませんだなア」といいながら頭の鉢巻をはずして立ち上り、私を家の方へ招き入れてくれた。

「手術もしたし、放射線もかけたし、尽くせる限りの手は尽くしましたがダメでした。あげくの果ては大借金ということになってしもうて……」

部屋の中はガランとしている。

「初めの症状だったか？」

「そうだな。なんでも初めは血がおりましてな。

わしら、年ですから、それは1月に1回くらいでっしゃろ、その時に血がおりましてな。

初めの頃は少のうおました。それに他にはどこも悪いことはおまへんし別に気にもせんとききましたが…。

半年たっても、その都度、血がおりまんで、こりゃ、病気かも知れんと思うようになりました。」

しかし奥さんは和裁の内職が忙しくて、医者に行こうと思いついた頃は暮のせわしない盛りで、徹夜することが幾晩もあり、とても“医者に行く余裕”がなかったのだという。

医者には“余裕”がなければ行かないものなのだろうか。〇〇さんはその“余裕”の条件についてこう話していた。

内職も断わりたくない

「まあ、わたしが職人でっしゃろ、わたしの取り高だけでは、とても生活が追いつきませなんだ。

家内の針仕事かて、そりゃあんだ、やればやったでなんぼかになりまっしゃろ。いいや、それどころか、まあ、バカにはできんもんでっせ。

長男が22才、わたしと一緒にの会社で、ブルドーザーの運転手をしとります。次男が18。今、イワシ舟に乗っとりますがそれも、そろそろ漁が終りですから、そうしたら近所の工場に働きに出たいというとります。

末っ子が小学六年。先妻の子供が女二人。それはもう、片附いてますがなんということはない、ただただ一生懸命に働かなくては、食べて行かれん状態です。そんなわけで、家内も、先生のところへ行くに行かれなかったんでっしゃろ…。仕立て物も頼まれれば、あっさり断わりもできしまへんやろ…。」

奥さんの様子についても、まさかガンだとは思ってもつかなかったのだという。

「家内の父親が胃ガンで亡くなったんです。わたしの母親が、それこそ子宮ガンで亡くなったのですが、わたしが、まあやこゝだった時分なので、どんな具合だったのか、全然知れしまへんねん。

家内のも、初めは、血がおりるのを、月のものかなアとも思うたりしてました。」

ようやくA病院に行った時、間違いなく子宮ガンだと診断されたそう。しかし、ほんとうに自分がガンだとは信じられず、続いてB病院へ。

そこでも診断は同様だった。

入院して徹底的に治療してもらおうと思ったが、部屋があいていないからというので、B病院には入院できず、C病院に入院したのだそう。

長い道程

それまでお勝手でコトコトやっていた女の子が、まな板と野菜物を持ちこんで、私達の話に加わった。

「今夜は、カレー・ライス、作るねん」

女の子の声は明るい。

——もうそんな時刻なのかナ？ インタビューを早いところ切り上げなくてはいけない、と思いながらもピッチは容易に上らない。

「手術はいつごろでした？」

「そうだなア…」

「うちが夏休みになってからやんか。」

「そやそや、そうやったな。」

開いてみたら、もう骨盤にまで、ガンがトビヒしていたというのです。

その後、注射をしました。

半年で退院したのですが、そのあと具合いの良かったのはわずか1カ月で、12月なかば頃には腸が通らなくなってしまう、胃腸専門のD病院に行きました。

そやけどなア、Dでは、もう手に負えんといわれてE病院に入院したんです。

手術は、もうできんということ、ラジウムとコバルトをかけました。」

「ほんまに、えらかったでしょうね」

「ほんまに…」とつぶやきながら御主人は病院の領収書とソロバンを持ち出して来て、ひとつ入れてみておくんはるかという。

手術代や放射線の費用、手術のあとたのんだ派出看護婦への支払い、病人のための特別の食費、家族が見舞いに行くために買った電車の定期代、また、ある病院では寝具持参だったのでその運搬費とか、その他、領収書のない出費と合計すると、結局70〜80万円はかかったという。

「そういうお金は全部、社長さんが立て替えてくれました。とにかくやるだけのことはやってあげるようにということで……。

国保を使いましたが、一時的にはどうしてもそれだけの払いこみをするようになりますな……。

その国保の手続きも、なんやかやいうて、今だにカタがついておまへんねん。

それに国保は使えんという支払いが多くて、結局はおおかた保険のないようなもんですな。

そやから、ガンなどという病気になったら、あるったけのお金は全部はがされてしまいますな。」

社長さんの立て替えてくれたというお金は、今、御

主人と長男と二人の給料から毎月5,000円づつ返しているとのこと、「10年計画ですわねん」というていた。

お母ちゃん 死んでよかった

奥さんが最後にE病院を退院してから亡くなるまでの1カ月間というものは、御主人と、12才になる末娘とが、全部、面倒をみたのだという。

「うちかて、よう働いたなア。」

毎日、1日に3回か4回か、腰湯つかわせて……」

「おりものの世話がえろうて、布きれを近所の人達からもらい集めて来てました」

「血がギョーサンおりて、便器一杯づつも出よったよ。」

そやけど、ようやく死んじやった。

お母ちゃん死んで良かったと思った。痛い痛いいうて、かわいそうやったもン……。

家の中かて、くそうて……。

うちな、お母ちゃん、病気になるってから、ずうっと御飯たいたよ、毎日。

ウン、学校行ったかて、お母ちゃんのことばかり考えてて面白ろくないさかい、たくさん学校休んだ。なア、お父ちゃん。

お母ちゃん、死んじやってからも、朝、はように起きて御飯つくらんならんさかい、遅うなったら、学校行くの、いやになんねん。学校、休んでしまうねん」

この4人の家族は母親の亡き後、家事一切をこの12才の末娘に依存している。だがしかし、彼女には荷が重すぎる。

殊に、彼女は裁縫を習い始めて、まだ間がないのでつくり物が一番困るという。

「この間も4人分の下着類のつくり物を近所のおばさんに頼んだら、かれこれ2,000円はかかったという。休まずに行けば行くほど、面白うなる所とちがう？ わたし、小学校の頃、いつもそう思うていたわ」といったら、彼女は「そうかなア。ほんまにそうやろか」というていた。

治療費のつらい工面

病人はただ亡くなったのではないのです。後の家族の人々に、10年にもわたる負債—そればかりではないのですが—を残していったのです。

また、相当に財産のあった人でも、とうとう、生保にかかるようになったという場合もあります。

田地も山林もあり、大きな家邸を構えた、謂わば村の“古い家柄”であった方なのですが、保険がなかっ

たので全額、私費で、最初の入院で40万円程使い、家を抵当にして組合から借金したのでした。

手術をうけ、ラジウム照射もうけ、退院後の経過も良かったのですが、そのうちに太股のつけ根が痛み出し、病院に行ったところが“再発”といわれたということです。

再入院。

しかし病院では入院を快く承諾してはくれず、押し問答の末、無理天理に入院しました。

家には、工員として働いている17才の次男と小学生の三女と御主人とだけで、22才と20才になる長女と次女とが住みこみで働いていますから、家で療養するにはやはり充分に手当てができない。ですからどうしても入院を望んだわけだったのです。

もう手術はできないし、体も弱っているから放射線はかけられないといい渡されて入院したのです。

その頃、御主人は病院に毎日詰めていました。そして、一日おきに“岸の神さま”といわれている〇〇寺にお詣りし、“アロエ”がうずきに効くというので、信仰している“岸の神さま”からそれを買って来て使っておられました。

しかし、しまいには新しいアロエが手に入らなくなってしまい、焼酎づけの古いのを使ったそうです。それから、ハコベの青汁もしぼって飲ませたそうです。

そんなわけで出費がバカにできない。病院への支払いもしなくてはいけない。しかし家や山は全部、借金のカタにしてしまったので、これ以上クメンの仕様がなくなってしまい、御主人は村の知り合いの人に相談にのってもらい、生保を頼んだのだそうです。

それでホッとひと息ついたものの、奥さんの病気は日増しにつのる一方で、それから1カ月後に奥さんは病院で他界されたのでした。

手術も受けられずに

この方達は手術もしたし、放射線の照射も受けたのですが、中には治療費の工面がつかないために、手術をしなかった人もいます。

そういう人の例として51才で亡くなった〇野さんの記録の中から一部をとり出してみましょう。

「うすい褐色のおりものがあるというので、家族の人が再三、医者に行くようにすすめたが、どうしても行こうとしなかった。恥かしいから厭だといっていたが、それより、家庭の経済状態を一番気にしていたようだと御主人が話してくれた。

医者に行ったのは血性帯下に気がついてから7カ月後だった。

それでも、病院からは、手術ができるからといって手術をすすめられたが、保険がなかったから、費用は総額30万円はかかるだろうと聞かされて、手術はあきらめてしまった。

世帯主である御主人が農業。24才の次男が御主人を手伝っている。29才の長男が土木業、そしてその奥さん。孫が2人更に末っ子の四男がまだ中学2年。

そんな大家族をかかえて、わずかばかりの現金収入である。保険もなし、医者から何気なくいわれた“30万円”は全くショッキングだったに違いない。

それまでは“医者に行くように”と励めて来た家族の人々も、もう“医者”とはいわなくなったそう。そして亡くなるまで、とうとう医者にはかからなかったという》

ガンと診断されても、経済的に困難なために治療しなかったという人が少なくありませんでした。

怒り——あきらめ

一回の訪問でインタビューの時間は平均1時間。府下全域にわたるので、住所の近い人々は同じ日に訪問しました。それでも週に5、6件。

それがみんな、つらく悲しかった思い出話であり、“お金を使えば使う程、早く死んでしまうのではないか”とか“保険を嫌う病院に行くのはつらかった。嫌うのに何故保険医という看板をかけているのだろう”というような言葉でも端的に表現されているのですが無形のものに対する怒りや憎しみさえもがこめられるように思うのです。

中には、こちらがたずねるのも気の毒な位に、あきらめ切っていた方もいました。

初めて医者に行った時すでに望みなしといわれ、いずれ助からないものを、痛い思いをさせたり、お金を使ったりするよりはと思って、お大師さまにおこもりをして気持の上で落ち着かせる方が本人のためにもよからうというので、2カ月半程“カムロ”におこもりをしたということです。

それでも治療を完全に諦めてしまったというわけでは勿論ないのです。知り合いの人でやはり同じ子宮ガンで〇〇県からとりよせた何とかいう坐薬を使って助かったという話をきき、早速それを取りよせて使ったということです。

末期にとくに痛んで困ったということがなかったのは、「お大師におすがりしていたからだんな」とはい

っていたのですが、それでも、「お金を使うばかりが“のう”でもないし」と繰り返しておられました。

みじめなゴール

病気の末期というものは、病人自身は勿論、家族の人々も、大変な苦労のようでした。

次の記録は、36才の若さで、小学四年と二年生の二人の子供を残して亡くなった方の御主人の話です。

「一回目に入院した時、手術をしました。二回目に入院したのは、もうどうにも手がつけられなくなったからですが、結局は本人の希望で退院しました。

世話は全部、おばあちゃんがしてくれましたが退院してから亡くなるまでの1カ月間、両脚や背中、とにかく体中、えろう痛がりまして、開業の先生から痛め止めの注射を専門にやってもらっていました。

寝具や下着類もできるだけやわらかい布地のものを特に選んで使っていました。

太股のリンパ腺にガンがトビヒしたとかで、そこが外に破れて、大きな花キャベツのようになってしまいました。

それを始末するのにオキシフルピヤンセット、ガーゼなど一式用意しておきまして、1日に何回も手当てしました」

小学生が休学して

この方は、おばあちゃんが面倒をみて下さったので、まだ不幸中の幸いともいえるのですが、次の方の記録は小学五年の女の子が休学して、生後半年の赤ちゃんとお母さんの世話をしたというのです。

《休にちょっとでもさわると痛がり、排便の後始末も満足にはさせない。

そのうちに、便は全部、おなかあたりの皮膚を破って出てくるようになり、そこにガーゼをあてたり、おむつも、沢山使ったりした。それらの布はクレゾール石けん液で消毒して、何回でも使えるようにした。

おまけにトコズレがひどくなって来て、それはアルコール綿でふいた。

食べものも、長い間、牛乳とジュースだけ。

家庭は72才の父親と、62才の母親。父親は蛍光灯配線の内職をしており、母親は日雇に出ている。

夫も日雇。

更に夫の妹とその夫。

この義妹は15才の時から関節炎をわずらい、手足の関節の自由がきかず、部屋の中を松葉杖をついてやっ

と歩いている。そして、きれいな仕事はできないのだが、内職に編み物や洋裁をあずかっている。

彼女の夫は職人で、表具師の店で働いているが大した収入にはならないとのこと。

赤ちゃんのミルクもつくらなければならないので、おばあさんが日雇いの仕事を休もうかとも考えたが、仕事を休めばそれだけ生活が苦しくなるから、どうしても休めない。

手術をした時も、つきそいさんを頼むなど、とうてい、かなわないことであり、小学五年の長女がとうとう休学したのだといていた》

つとめを休んでも

またある方の場合には、長女が工場づとめを休んで看病したのですが、その2カ月間のサラリーが全額、停止されたということもあります。

しかし、家政婦を頼めば1日350円、2カ月でザット2万円余り。時には食事付きになることもあるらしい。サラリーを停止されても、それでも自分の娘に世話になりたかったのでしょう。

助からない病気の末期の世話はほんとうに大変らしく、経済的に恵まれている方の場合には、おばあちゃんがいても、なおかつ、二人のつきそいさんを頼んで昼夜交代でみてもらった、という方もありました。

ともしびを

自分の肉親がガンで倒れたという人は、医学的には素人であっても、現代の医療の弱点をズバリと衝いていることがしばしばです。

早期発見、早期治療ということが叫ばれています。そこには必ず何らかの隘路があり、その隘路が何であるかを、その人々は示してくれるのです。

赤ちゃんが生れた時、お医者さんは「ガンがあるらしい」といったが検査は何もしてくれなかった。そして1年後に突然、出血したという人の家族は、ガンの疑いがあったら直ちに検査をしてほしい、また権威ある施設への紹介ルートのようなものを定めてほしいと望んでおり、また、体が弱っていて、放射線の照射にとっても通院できないといっても、空きベッドがなくて入院できず、病院の近くに家を借りて通ったという人々。

そういう一人一人の話をきいているうちに、その話の中には、病気そのものの苦しみの他に、たどって行けばやがて解決の糸口がつかめそうな様々な社会的な要因が背景にあって錯乱していることを感じました。

Toshiba

診断用 X 線装置
 治療用 X 線装置
 工業用 X 線装置
 X 線管・整流管
 増感紙・蛍光板
 X 線用附属品各種



定 格	撮 影	60 kVp	500 mA	1 秒
	透 視	95 kVp	4 mA	連続
使用 X 線管	D R X - 70 型 (油浸・回転陽極・二重焦点)			
使用整流管	K 33 E 型 (全波整流方式)			
電 源	単相交流 200 V 50 60 ⁰⁰			

TOSHIBA 東 芝 TOSHIBA

S K 式 心 電 計
 直記式
 8 系統 脳 波 計
 12 系統
 血液等保存用恒温槽
 殺 菌 灯
 家庭電気器具各種

放射性同位元素照射装置
 放射線測定器各種
 放射線防護用具各種
 放射性物質遠隔操作装置
 放射線関係各種機器
 体 温 計

東芝放射線株式会社 大阪支店

大阪市北区伊勢町六番地 電話 (06) 3778~9・7804 番

京都出張所 京都市中京区堀田(通蛸薬師) 10 (東芝商事京都営業所内) 電話 (2) 1018・1527 番

神戸出張所 神戸市生田区北長狭通5-1 (東芝商事神戸営業所内) 電話 (4) 4771~3 8335 番